

三大考

古事記傳十七附卷

和
一〇五二一
號

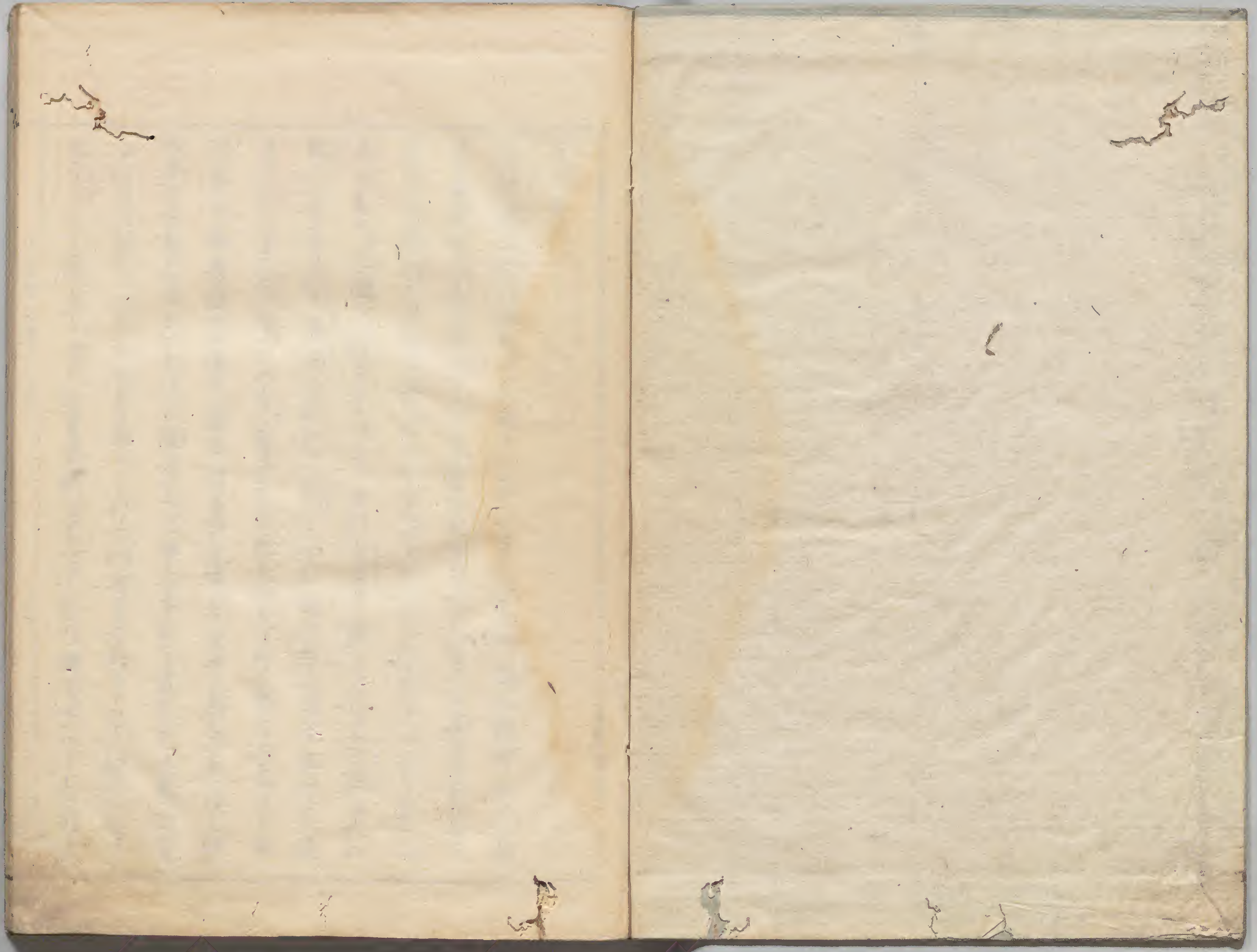
和書門			
一〇五二一	號	類	
七九	函		
六	架		
四八	冊		

內閣文庫			
一〇五二一	號	類	和書
四	冊		
三七	函		
一	架		

內閣文庫			
番號	和	10521	
冊數	48 (48)		
函號	137	1	

和
一〇五二一
號





あつては、人の智れ、度となくべき限、非とバ、理を以て云、説を、
信らざる人乃考へず、知るべきは、目及ぶ限、心の及ぶ限、測算の及
ぬ限、そのつと、其及ばざる所、至るまで、いづれ考へても、知るべき由なり、然
るに、此天地の成りたる初、又これ如く成竟し、はぎくは、さぬれども、
百萬千萬歳、乃後、生れる人、いづれ其初をよ、知こと、は、
う、吾皇大御國と、殊、伊邪那、伊邪美、二柱、大神の、生
成、賜へる御國、天照大御神の、生坐、依御國、皇御孫、尊、此、天地
を、共、遠長、お所知、着御國、おとし、萬國、お秀、で勝、て、四海、乃、宗國
も、る、故、お人の、心、も、直、く、正、しく、と、外國、乃、如、く、さ、ら、
る、故、や、天地、乃、初、の、事、な、し、も、正、しく、實、に、説、有、て、い、
さ、ら、ら、加、ふる、と、お、つ、り、は、あ、く、神、代、より、傳、り、來、お、る、と、
ぞ

虚偽なき真乃説は有ざるごとく、彼漢國の説たるは、
お理深く聞えて、信お然るべしと思は、皇國は傳へ、
の理も無きが如く、聞ゆるごとく、彼を妄説、此を眞實、
至る、か、ろ、く、考、へ、精、く、お、随、て、か、の、虚、妄、説、も、
非乃、顯、と、ゆ、く、此、眞、の、傳、と、違、ふ、と、
て、遙、お、西、ある、國、と、は、人、ぞ、と、ハ、海、路、お、心、お、ま、か、
く、お、り、て、此、大、地、乃、つ、り、お、つ、り、見、究、て、地、を、
浮、る、を、日、月、を、其、上、下、へ、旋、る、と、考、へ、得、ら、ぬ、
と、も、皆、つ、く、違、へ、る、と、多、き、を、以、て、
お、定、む、る、の、信、を、
虚、中、お、一、物、の、成、り、し、と、
お、古、事、記、傳、十、七、附、
〇、二

の現乃、ゆりかたお合せ考ゆり、いさゝかともあつたし、こゝに
以て、古傳の真相を、いさゝか知なきこと、かの遙の西國乃人、右の如
く、此大地乃ありか、いさゝか見きか、又大虚空なる、いさゝかとも
あつたし、精密考得て、漢人の説と、いさゝか勝る、いさゝかとも多
く、いさゝかとも、いさゝか測算及ぶ限、いさゝか其及ぶ所、今
の現の事、いさゝか知盡を、いさゝか多きと、いさゝか大地
日月、いさゝか成る、初に、知なきや、いさゝか思ふ、其國、
いさゝか各其説、いさゝか有る、いさゝか又皆例乃、後人の、いさゝかはり、おて、
かの天竺、或は漢國の説、いさゝかいさゝか、いさゝか皇國乃傳へ、
いさゝか其類、いさゝか非む、先皇國ハ、神乃、言擧せぬ、國と云、萬
乃事、外國の如く、いさゝかいさゝか、いさゝか言痛く、論む、いさゝかいさゝか、いさゝか

大らう、御國ゆり、いさゝか故、天地の初、乃説、いさゝか外國の説、ど
どの如く、いさゝか此故、いさゝかいさゝか、いさゝか云、いさゝか理、いさゝかいさゝか、いさゝか
如し、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝか説諭、いさゝかいさゝか、いさゝか有、
いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝか
國の説、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝか
て、いさゝかいさゝか、いさゝか論、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝか
いさゝか、いさゝか外國、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝか
其説、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝか
いさゝか、いさゝか外國、乃説、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝか
いさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝか
得、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝかいさゝか、いさゝか

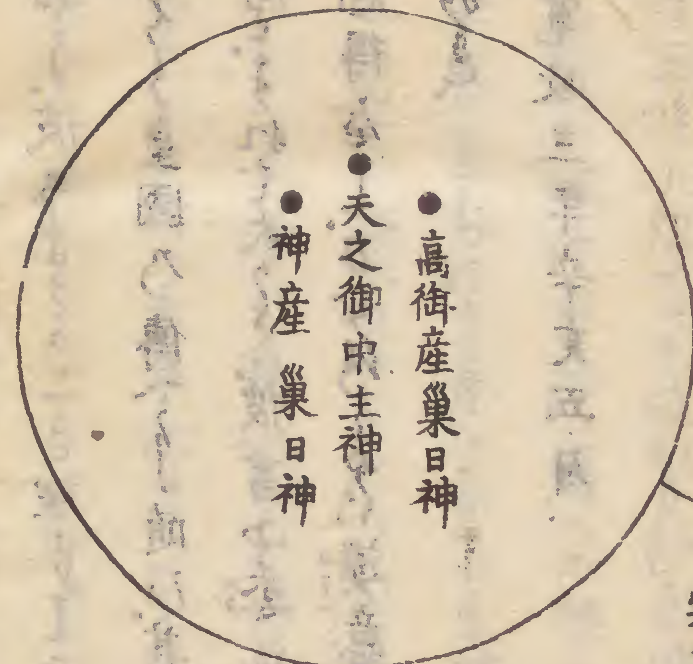
がしとぬらふととさうりて、つらうとと外國の意をきくへぞ、專^{モハラ}皇國
の古傳、お依て、そのおひむき、^{ツツ}委曲お考得て、古事記傳を著し給
へふおぞ、神代よるお傳への趣を、ゆるび世お明らきうなりおぞ、
中庸をもちおき身たきこと、神の御靈^{ミタマ}お幸厚く、此大人の同郷お
ぞへ生きて、勢のいとも、にまの、つらり其教を受て、正しき、はらの道
のうらり、^ハ波も、窺ふとを得、^カか、^カ此、天地乃初のさぬ、又其つら
か、^カた、^カど、^カかの古事記傳、^カよりて、古傳説の趣お見るお、^カう、^カお人乃
造、^カ云、^カ彼外國乃妄説ぞ、^カは、及ぶ、^カう、^カおつら、^カ真^{マコト}お、^カは、^カを
く深く、^カ妙も、^カ味ありて、神代の傳説の、^カ世お、^カぞ、^カとて尊、^カは、^カと、^カ悟
^カた、^カ如此、^カを、^カ又、^カつら、^カう、^カ己お、^カ思ひ、^カう、^カは、^カと、^カ有、^カき、^カは、^カ大人お、^カ申
^カ試、^カう、^カを、^カハ、^カら、^カと、^カあ、^カら、^カら、^カお、^カ許諾し給へるま、^カお、^カ其次、^カ第、^カの、^カお

りむき、^カ十箇、^カは、^カ圖^{カタ}お、^カう、^カき、^カつら、^カう、^カ其、^カお、^カと、^カは、^カ書、^カ添、^カて、^カ一、^カ巻、^カと
なり、^カ三、^カ大、^カ考、^カも、^カ名、^カけ、^カつ、^カ三、^カ大、^カを、^カ天、^カ地、^カ泉、^カは、^カ三、^カあり、^カこと、^カと、^カ大、^カと、^カ云、^カぞ
と、^カ漢^{カラ}お、^カき、^カし、^カし、^カれ、^カど、^カ書、^カは、^カ名、^カお、^カと、^カハ、^カさ、^カし、^カも、^カら、^カへ、^カま、^カし、^カう、^カと、^カ其、^カ何、^カお
やう、^カ彼、^カあ、^カよ、^カと、^カう、^カと、^カき、^カ理、^カり、^カて、^カ云、^カお、^カ外、^カ國、^カお、^カの、^カ説、^カを、^カと、^カと、^カて、^カ取、^カら、^カば、^カと
と、^カ皇、^カ國、^カ乃、^カ傳、^カへ、^カり、^カ随、^カひ、^カ其、^カ説、^カを、^カと、^カと、^カて、^カ事、^カハ、^カ古、^カ事、^カ記、^カ傳、^カお、^カ依、^カて、^カ
と、^カさ、^カれ、^カむ、^カ大、^カく、^カハ、^カ彼、^カ書、^カお、^カ委、^カゆ、^カて、^カこ、^カま、^カら、^カに、^カお、^カい、^カは、^カら、^カ書、^カは、^カ着、^カて、^カ
心得を、^カし、^カ日、^カら、^カは、^カら、^カも、^カ漢、^カ意、^カの、^カ説、^カの、^カの、^カお、^カひ、^カお、^カと、^カ人、^カお、^カと、^カと、^カお
か、^カと、^カ

寛政三年辛亥五月

伊勢人服部中庸

第一圖



- 高御産巢日神
- 天之御中主神
- 神産巢日神

此輪ノ内ハ大虚空ナリ。輪ハ假ニ図ルノミゾ。実ニ此物アリトニハアラス。次ナルモ皆然リ。

○三柱神ノ座位ハ記ノ文ノ次第ニ依テ。假ニ如此書ルノミナリ。必シモ拘ルベカラズ。

記曰。天地初發之時。於高天原。成神名。天之御中主神。次高御産巢日神。次神産巢日神云々。

此時ハ天も地も何れもなかり。然るに天地初發之時。云々。後より云々言ふ。世は初とつて。高天原ハ何れも。此三柱神の成坐。

第二圖



此處後ハ高天原トナル。故ハ後より如此云。依語。

輪中ノハ第一圖ニ舉タル三柱神ナリ。

書紀曰。天地初判。一物在於虚中。狀貌難言。又曰。天地未生之時。譬猶海上浮雲。無所根係。又曰。天地初判。有物若葦芽。生於空中。云々。又有物若浮膏。生於空中。

書紀の傳へざると。かく如く各少しづの異有りて。全く同じか。いへど。彼此を合きて。其さるを知。たゞ。天地初判とある。ハ。世の初といふ。初

判あが書れりハ、漢文あり。判字お拘カハふべく、天地未生之時、もと有り。又虚中空中、もと有り。いまだ地も何ナニも無き時、たゞこれを知りし、もと書紀も、はとをて漢文を誘カサらんと、ほぞお細コトおふとき、ハ當らぬ文字多く、漢文より引きておのづから古傳のありむまじき、まじりき事も多し、其心して見るべきなり。○記ハ此、一物乃初えて成り、記さるべし。○此一物の虚空、もと有りて、既ハ一物の生り、もと知らし。○此一物の虚空、初め生り、より始えて、次第ハ第十圖乃如くお成り、はなして、こと皆悉く、高御産巢日神、神産巢日神の産靈アスビふよりて生成、ふし、其産靈ハ、心もと、靈ミコトく奇オトシく、妙タマシなるもの、おとて、さうお尋常ヨソナリハ、理を以て、測知ハカなき限、お有り、此天地の初

を、太極陰陽乾坤を以て、理を以て、かゝるこも、よつ、漢國人乃説、
 ねぞ、ハ、みさ、此産靈アスビの神靈ミコトふよりて、生る、は、故の妄説ミダリゴトシ。

第三圖



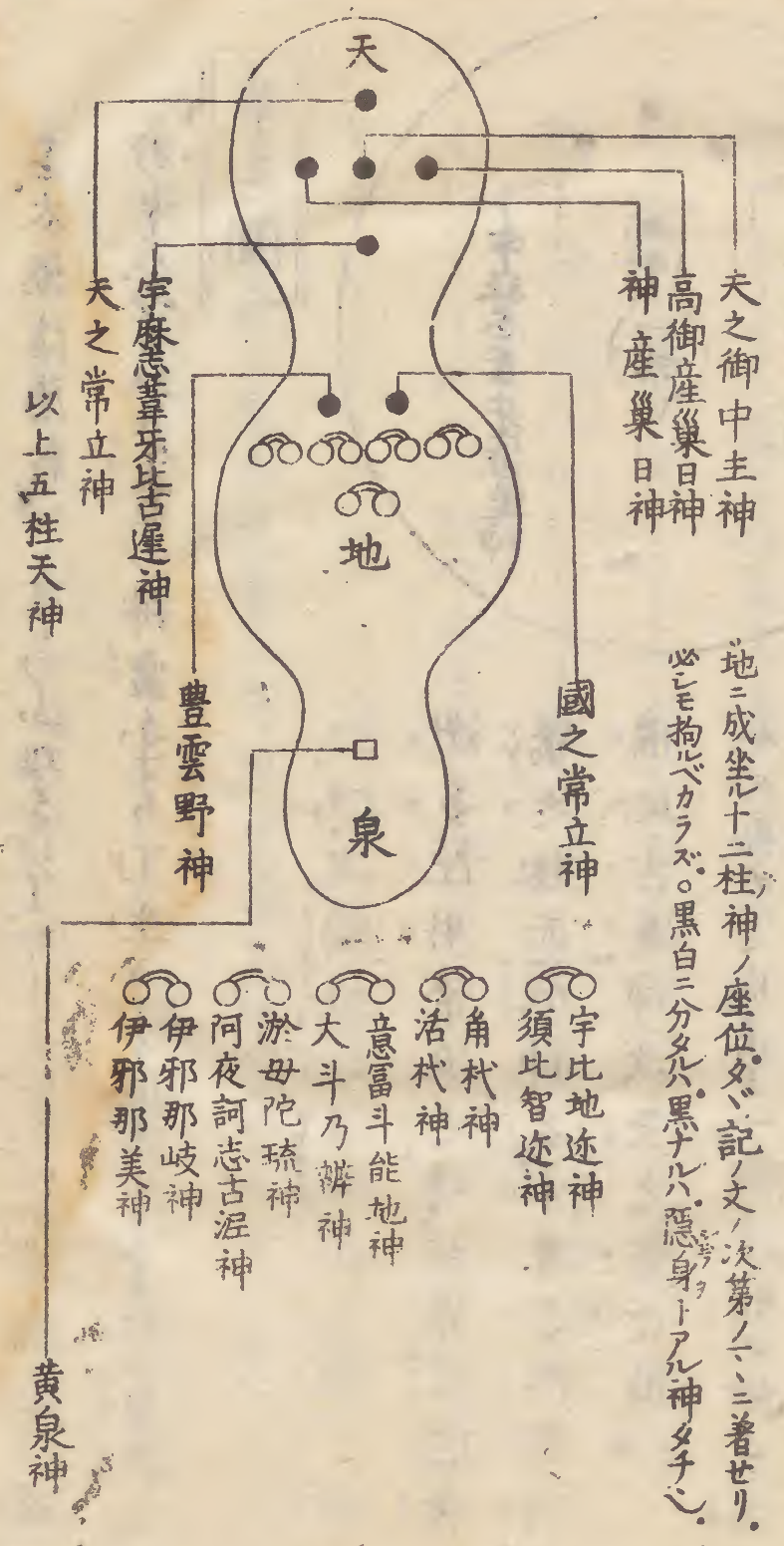
記曰、次國雅ニニワカニテゴト如浮脂ウキアゼラン而久羅下那クハラゲナ
 洲多陀スダタ用幣流之時ヨルトキニ如葦牙ヨシガ因萌ヨモ
 騰之物アガレルモノ而成ナリ神名ミナ宇麻志ウマシ阿斯訶アスカ
 備比古遲神ビヒコジノカミ次天之常立神ニニメノカミ云、
 か、初めて成り、一物、浮脂ウキアゼの如く、虚ソラ
 空より漂蕩ウラハラへるなり、さして其物の中よ
 り、葦牙アスカ如く、萌上モエアガは物あり、これ天アマ

○古事記傳トヒ附

残るるが堅まりて地と成る。是れ此時をいふ。海と國土との分ちぬどもたぐし。混つぎしぬもくし。たよひていふ。

第四圖

是ヨリ次々ノ圖皆外輪ヲ畧ケリ。紙ノ地ヲ虚空ト見ズシ。



記曰次成神名國之常立神云々上件自國之常立神以下伊邪那美神以前并稱神世七代。此を天神七代と申は後世の俗説也。此神よりハ天神ハ何れ地ハ成坐居神也。彼葦牙の如く萌上る物漸お騰る。漸お成て天となり。其跡お残る。地と成るべき物ハ未堅まり。混ちて漂へり。○記曰。於是欲相見其妹伊邪那美命。追往黄泉國云々と見え。黄泉といふ國あり。然るも其黄泉の初發乃事ハ記ふる書紀おも見え。傳説するれば知べき。非也。も。萌騰る物何れ。天と成るる。小准へる。思ふ。彼一物の中より。垂降る物も有て。黄泉と成るる。其根國底國と云て。地下お在る。故今其趣を以て。圖り着せり。泉と記する物是なり。泉字ハ只

漢文を假^カ依^ノの^ミ字^ハ拘^カま^スべ^クら^ズ其^ノ垂^リ降^ルア^リて成^ス事^ハ天^ノ乃^ハ萌^上ア^リて成^スる^ト何^レ先^キ何^レ後^キアリ^ク知^ベク^ラズ^ニ理^ヲ以^テい^ハむ^ル例^ノ漢^ノ意^ヲ安^クし^テ泉^ノ事^ハ第^七圖^ノ下^ニ委^ス云^ベし^{。○}此^ハ次^ク天^ト地^ト泉^ト漸^ク分^ク漸^ク相^ツ遠^クカ^リゆ^キて遂^ニ第^十圖^ノ如^ク成^リ居^ス。

第五圖



是ヨリ次^クノ國^ニハ天^ニ成^ル坐^ル神^地成^坐神^多其^國用^{アル}ヲ^ニ基^テ餘^ハ畧^スリ。

○外國トモノ在^ル處^又ソノ大小^其數^ナド此^國ニ拘^ルベ^カラズ^タ假^ニ大^カタ^クセ^テ著^{セル}ニ^シ但^シ皇^國ノ在^ル處^ハ國^ノ如^シソ^ノヨレ^次ニ^云リ。此^國ハ二^柱神^國ヲ^産成^シ給^ヒ又^外國^トモ^成テ^國主^ト海^トガ^レル^ウハ^ナリ^サナ^リ。

記^ク曰^ク於^テ是^ニ天^神諸^命以^テ詔^シ伊^邪那^岐命^伊邪^那美^命二^柱神^ニ修理^固成^是多^陀用^幣流^之國^云々故^因此^ハ八^嶋先^所生^謂大^八嶋^國云^々書^紀曰^ク處^々小^嶋皆^是潮^沫凝^成者^矣。二^柱神^ノ此^大八^洲國^ヲ産^給へ^ル世^ノ人^漢意^ヲ以^テ見^依故^ハこ^ト波^信を^して種^々如^まさ^しに^説あ^とも^そハ^みる^私し^と如^く御^腹より^生賜^へる^の但^し其^委曲^キ状^ハい^兒を^産ガ^如く^御腹^{より}生^賜へ^るの^但し^其委^曲キ^状ハ^いカ^らう^らう^を傳^へる^とバ^知ら^ずけ^とぞ^と今^こト^ハ思^ふふ^まが^高天^原より^降坐^時天^浮橋^ハ立^上り^て沼^矛を^以て^かの^浮脂^ノ如^クふ^ゆよ^る物^ヲを^搔成^し賜^ひて^引上^給ふ^時其^矛ノ^鋒よ^り滴^リ落^ル物^凝り^て淤^能其^峇呂^嶋也^と其^矛乃^ハ滴^ハ微^き物^なれ^{ども}。

其物因て漂へる物聚り凝堅りて廣く大ききなりて一の嶋と
て成るなり。大八洲を産賜るも其如くして。二柱神の交合
乃滴女神乃御腹内合凝成りて。御腹より産出給ふや
らち微小き物あれども其物よりかの漂へる物寄聚り凝て國土
と成る。近く人身体成る初も知べし。父母は交合乃時より
滴る物も微あつと。月を經て兒の形と成る。おろしや。又人
と鳥獸魚虫なりと。生さ出る時ちち小くも。漸く大き
おや。其中小く殊は蛇なり。生さるは尋常は小虫ある
が年久く經て大蛇となつ。お至ては。外は大ききなり。形
らちや。又草木も同じ。おて生初は二葉の時ち。小くも。ど
年久く經て。雲のさとのぐ大木と成る。神代乃は。年序ハ

いしく久しに。おさ。此國土も産出賜へるなり。全く國土と成
り。幾萬歳を經て。其間ハ。おさ。と大ききなり。お
さ。珠の國土の初は。産巢日神乃殊る。産靈およりて成る
は。おさ。女神乃御腹より産出賜へる。おさ。お疑ふべき
お非ざる。を疑ふ。正しに。倭魂より。例のな。おさ。お
漢意なり。國を産成し給ひて。國土と海水と分て。漸く
大地を堅めり。外國は。初は。二柱神大八洲を生
賜ひて。國土と海水と漸く分ち。お随ひ。此處彼處と。潮沫
の。おさ。お凝堅り。合さ。乃。大きき。小くも。成る
る。の。産巢日神の産靈より。成る。こ
おさ。外國ハ。二柱神の産給へる國。お非は。是。皇國

と初より尊卑美悪きまじらえれ分極くゆるしつゝして
 後より外國をみる少名毘古那神の天降らるを經營給らる
 なり。此ら此事古事記傳小見えより披き見て然る所以を知る
 べし。○皇國の在處を因の如く大地乃頂上し其故ハ初葦
 牙の如き物乃萌上り初根の處よりして天地と分きて後ハ
 天浮橋乃往来つらして未斷離きば續きてありほど正し
 く天と上下相對へる帶此處皇國をよむるも下と横と
 虚空小懸りて圓體なる物をも何方をよむるも下と横と
 も云べきふつらび此方より下とよむる方ハ其方よりハ亦此方を下
 とよむ横の方より何方よりも同トありしと心得るハ一とあり
 乃ともゆる其も天と地と離りて今の如くたつとつゝ入る

のみ知て元の状を知らしむるものしる大地を上下もつら
 前後もあつと師の説とつら第十圖の下小拳塚が如く

第六圖



是伊邪那岐命ノ黄泉國ニ往還リ坐シ路ナリ
 此道ハ地中ナリ出雲國ノ伊賦夜坂ヨリ通ス

此処出雲國伊賦夜坂

伊邪那美命

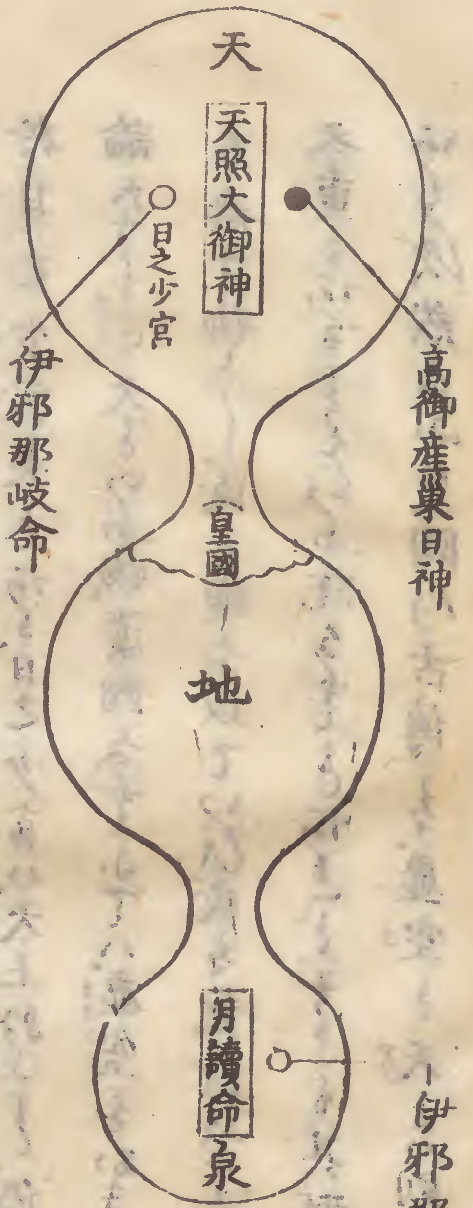
記曰既生國竟更生神云々又曰故伊邪那美神者因
 生火神遂神避坐也又曰伊邪那岐命欲相見其妹伊
 邪那美命追往黄泉國云々故号其伊邪那美命謂黄泉

○古事記傳十七附

〇十

津大神云々故其所謂黄泉比良坂者今謂出雲國之伊
 賦夜坂也此より黄泉國小坐神ハ伊邪那美命ニシテ
 此段より此神の御言小與黄泉神相論ト云ハ既ハ別神ト
 有シ故第四圖小是を挙フ然レトモ其名も傳テシ
 幾柱ト云々トシタリトバビノクハ神ハハクシシモ思フ
 ○黄泉比良坂ト此國土ト泉國トの堺ニ其在處ハ此國土よ
 々大地ノ入際ノ又々大地ノ中心小ワケウ又ハ大地ト泉ノ間
 小在ルヲ詳クシテ記ノ趣ト出雲ノ伊賦夜坂ニシテ其
 處乃如ク聞ユリ然ラバ大地中に入ル際ニシテ
 カトシトハハクシカク黄泉比良坂ノ通ヒ一處ト伊賦
 夜坂ノ通ヒ一處トシテ傳ヘシムルモハクシ

第七圖



○天ハ即日ナリ其中ル國ヲ高天原ト云

伊邪那美命

○泉ハ即月ナリ其中ナル國ヲ夜之食國ト云

記曰是以伊邪那岐大神詔之云々到坐竺紫日向之橘
 小門之阿波岐原而禊祓也云々右件八十禍津日神以
 下速須佐之男命以前十柱神者因滌御身所生者也云
 云賜天照大御神而詔之汝命者所知高天原云々次詔
 月讀命汝命者所知夜之食國次詔建速須佐之男命汝

命者所知海原矣。高天原ハ天あり御國ニ書紀あり。大日靈貴云々。是時天地相去未遠。故以天柱奉於天上。中何と。天と地と泉と。初ハ混一なり。漸分色。漸相遠。なり。是時未遠。遠かり。なり。次第ハ國を見。其狀亦知。又書紀ハ伊弉諾尊於是登天。報命仍留宅。於日之少宮矣。と。日之少宮ハ天上。仍留宅。字。論たり。○天といふ物。漢國を以てハ。虚空を以て。別ハ其體。多無き物。或を理を以て。或を氣。以て。又重。又重。然る皇國乃古傳。も。虚空と天とハ別。して。天ハ也。葦牙。如く萌上。もの成。正。其體ありて。高

天原とて。其國も。又天竺國。高天原。似。體。高天原ハ。虚空。上方。見。然思。見。賜。高天原。見。又大御神ハ。大地を周。下方。至。坐。高天原。上方。在。云。高天原。遠。故。見。大御神。御光の坐。故。其御形。乃。見。賜。云。云。大地。包。其。上下。四方。周。云。云。乃。如。萌上。成。小。如何考へ。見。此。高天

原は在^リ處心得^ヅ。故中庸^ハは^ク思ふ^ハ異國^ハ云々^ノの天^ハと^ハつ^ハ高天原^トい^ハか物^ハと^ハ虚空^ハ非^ズ虚空^ハ乃^チ上方^ハ別^ニつ^ハ非^ズ日^ハ即^チ高天原^ハなり^ク。ま^ニ日^ハ天照大御神^ハ非^ズ其所^ニ知^ル者^ハ御國^ハと^ハ大御神^ハ日^ハ中^ニ坐^ル神^ハ其^レ故^ハ記^スの神武天皇^ハ段^ニ小^ニ吾^ハ者^ハ為^リ日^ハ神之御子^ト向^テ日^ニ而^テ戰^ハ不^レ良^トつ^ハ此^ハ日^ハと^ハ日^ハ神^ハと^ハ別^ニる^ハ日^ハ神^ハと^ハ日^ハを^ハ所^ニ知^ル者^ハ神^ハと^ハ申^ス以^テ意^ハま^ニて^ハ高天原^を所^ニ知^ル者^ハ神^ハと^ハ申^ス以^テり^ハ同^ジ又^ハ須^レ佐^之男^ハ命^ハ參^上坐^ス時^ハ大御神^ハ丈夫^ハの御裝束^ハお^して^ハ待^チ給^フる^ハ全^ク人^體の如^クく^ハ好^ム神^ハ坐^スと^ハ明^ラき^ハ日^ハ好^ムと^ハ申^スか^ク又^ハ八咫鏡^を此^ハ大御神^ハの御象^トと^ハ申^ス以^テて^ハ實^ニハ^ハ人の如^ク好^ム御形^ハま^ニ

申^スせ^ラも^ハ大御光^ハ乃^チ熾^クふ^ハ遠^ク瞻^奉れ^ハ圓^ク見^え賜^ハふ^ハ好^ムと^ハい^フと^ハ其^ハ此^ハ國^ハ土^ハより^ハ然^ルも^ハ見^え賜^ハは^ハ彼^ハ御鏡^を造^リ奉^リハ^ハ高天原^ハ少^シ事^ハ好^ムと^ハ御象^を圖^トと^ハな^リバ^ハ真^ニの御形^を圖^ト奉^奉べ^クと^ハい^フと^ハ下^ノ國^ハ土^ハより^ハ瞻^奉れ^ハる^ハ状^を圖^トと^ハ抑^テ此^ハ御鏡^を此^ハ神^ハ乃^チ御象^トと^ハ申^ス以^テて^ハ書^紀の^ハ一^ニ書^ハお^して^ハ一^ニ處^ニ見^える^ハ其^レ餘^ハの^ハ一^ニ書^ハと^ハも^ハ見^える^ハと^ハ記^スも^ハ見^える^ハと^ハい^フと^ハ大御神^ハの御形^ハ似^テて^ハ造^ラる^ハ非^ズ此^ハ神^ハの御影^をと^ハつ^ハ奉^奉む^ハと^ハも^ハ作^スる^ハ御鏡^ハと^ハ大御神^ハの天^ハ石^ハ屋^ハに^ハ隱^レ坐^スト^ハ時^ハ此^ハ鏡^を示^シ奉^リて^ハ其^レ御影^ハの^ハ此^ハ鏡^ハと^ハつ^ハり^テ見^え賜^ハふ^ハ御覽^して^ハ吾^ハ等^ハに^ハ神^ハの坐^スと^ハ所^ニ思^フむ^ハと^ハも^ハ構^ヘる^ハ

なり。記を見て知べし。然るに其書紀乃一書乃説ハ御影
まうつさるるにいつかたききて御象を國せりとも申傳へ
ふりのおぼへし。さて日ハ即かの葦牙は如く萌上りて成る家
物りて。天と云物も。即是なり。又云高天原と云古事
記傳ふ見えし。おぼく其天あり。此國土乃如く國のあなを
かくして此大地よりつる國ハ皆地の外表方お属とも天おつる國
ち内裏方お属しむりと思つ。其故ハ記ふ天若日子が雉を射
上りて。矢の高天原お坐高木神の御許お至る。初お射
上つた矢の穴より。衝返り降り給ふといはる。内裏方お國あ
み。此大地なる國の例は。泥み。疑もへきおつる。物の理を
窮る。妙なるりのなれば。さて天も其質りをもつ。此

國土は如く。あま非は。清く透る物なり。其内なる御國お
坐す。大御神の大御光乃照徹して。虚空を大地を。普く
照し賜ふ。さて日此光と見ゆ。ハ実ハ日此光よりつる。天
照大御神の御光おつる。はて第三第四の國お奉る。如
く。高天原より五柱天神坐す。又伊邪那岐命と留坐させど
と。其高天原を所知る君なる神も。天照大御神。但し
君お非は。さて餘神等。臣なりと思つ。ハ漢意。君お非は
といふ。臣も。臣も。皆至て尊に神とす。○夜食國ハ中
庸思ふ。即泉國の。泉ハ根國底國とも云。大地の下方
お在る。つぎ。國乃如し。さてその泉も。即ち。月おきて。月
讀命。所知る國是なり。さて。月讀命ハ。月ハ非は。月ハ中

お坐まする神かみなりし天照大御神アマテラスは日乃内ヒノウチおまするゆきをも同じじ
如此カクイフ云い故ゆちもづら夜食國ヨククニと云い派はしめ月つきと夜よを照てし給たまふ
との見みてハ食國ヨククニといふは必かな別わかれた其國そのくに無なくハいはらるる
らら黄泉國ヨミクニハ夜よの國くにといふは其國そのくにをもする神かみなりし故ゆに
月讀命ツキヨミとハ申まひし國くに名なは黄泉ヨミと御名みことなの讀よみと同じきを思おもふ
べし豫美ヨシミとハ月つきの夜よ見みゆる物ものなり故ゆに名ななりしべしと書紀しよき一
書月讀命ツキヨミの保食神ホクシカミを殺ころし給たまへる段くだみハ天照大神アマテラス云いハ乃與すなは月
讀よ尊みこと一日いちにち一夜いちよ隔離ワカレ而して住すといふは此こゝ一日いちにち一夜いちよといふはいふ見
ても心得こころえがな故ゆ思おもふは古傳ふるでんハ日ひ夜よといふは漢
文ぶんを潤色じゆんしきして一日いちにち一夜いちよといふは書かれるは亦またいふはられる然しか類
多おほくといふハ日ひ夜よ隔離ワカレとハ大御神オホミカミを高天原タカマハラおまする月讀命ツキヨミと

夜食國ヨククニおまするししの隔離ワカレといふは國くにといふは知しべし大御神オホミカミ
の御名みことな派は大日女命オホヒルメノミコトと申まひし其御光そのみか乃すなは照て及およゆ限かぎを畫かきと云い
其御光そのみか乃すなは及およぬ處ところハ夜よと云いハ夜食國ヨククニハ大御神オホミカミの御光そのみか乃すなは及およ
むぬ國くになり抑おさ今いまは如ごとく日ひ月つきは旋轉せんてんスル後のちの事こと也なり是こゝは
第九第十の國くに乃すなは下くだふは云いべし初はつのほろをも上うへの件くだの國くにといふは如ごとく
天地泉アマツチヨミと三さん連接つなぎきし物ものも旋轉せんてんスル也なり泉いづみ
ハ大地おほつちハ隔わてるも御光そのみか乃すなは及およびししし夜食國ヨククニハ
高天原タカマハラは如ごとく内裏うち方かたは外そと表へ方かたは又また大地おほつちなり國くにの如ごとく外そと表へ方かたは
在ある知しる若ごとく外そと表へ方かたは月つき中なかおまする見みゆる物ものこ
も其國そのくになり所ところ知しる神かみを月讀命ツキヨミと或ある人ひと疑うはしる向むかひしる
せし其國そのくにも所ところ知しる神かみを月讀命ツキヨミと或ある人ひと疑うはしる向むかひしる

夜、食國を月讀命とてしりしをばらとてしりし。然も引とてしりし。根國泉國とてしりし心得は根國を須佐之男命の逐つて罷坐ぬ國なり。月讀命の事とてしりし。其國の非をいふ。答ふ。先伊邪那美命、泉國を坐す。須佐之男命は此國根之堅洲國と詔へば、泉と根國と一なり。論なり。かくて是乃根國即夜、食國なり。由ハ、師の古事記傳九の卷ハ、月讀命と須佐之男命とハ、一神なりと思ふ。其由を奉らるる。中庸は、是を思ふ。書紀ハ、月讀、尊者可以治。滄海原潮之八百重也。見えし。記及書紀一書ハ、須佐之男命ハ、滄海原を所知なり。今現ハ、海潮乃滿。于此、月の起るり。お随ふ。須佐之男命と申は、月讀命の

亦御名也。信ハ一神なるべし。又書紀の傳ハ、汝考見は。何との傳へも、須佐之男命は悪行を奉る。保食神の一書。ふのハ、須佐之男命は事ハたつて。月讀命は悪行を奉る。其事即記す。須佐之男命は事ハたつて。全ハ一神とて聞ゆ。と。月讀の讀ハ、黄泉と名同く。夜、食國ハ、由り。又記ハ、須佐之男命の啼泣賜ふ。伊邪那岐命は問給へ。御答ハ、僕者欲罷此國根之堅洲國故哭とつ。欲罷とて、此國ハ、罷らむ。願欲ハ、給ハ、如く聞ゆ。然らば、欲字ハ、將の意也。罷らむとて云はる。穢き泉國ハ、罷らむ。みは、哀さふ。愁哭賜ふ。然も、始り。此神ハ、泉國を所知せし。任ハ、賜へる。是即、月讀命ハ、夜、食國を任ハ、賜

ぬと一つたり。書紀ノ素盞鳴尊是性好殘害。故令下治根
 國。故汝可以馭極遠之根國。故汝初より根
 國を任し給ふ趣おほく思ひ合せてはるべし。さるばりを須
 佐之男命と申しし月讀命は一名なるがほぎきて別神の如く
 傳つるもか。御事依のちも何と彼と此と二つおありし
 ぬ。書紀ふ月神可以配日治。故亦送之于天。おとつる
 月日此旋轉。お世ふたり。後其見ゆるはるより。さるべし
 伝傳へるべし。月讀命須佐之男命は一神として見るべし
 ち。本は紛つるも。何事と明らかふ。夜食國を
 以ち。泉國根國
 なる。疑なきりたり。

第八圖



記曰大穴牟遲神云々御祖命告子云可參向須佐之男
 命所坐之根堅洲國必其大神議也故隨詔命而參到須
 佐之男命之御所者云々大神追至黃泉比良坂遙望呼
 謂大穴牟遲神曰云々始作國也又曰故自本大穴牟

遷與少名毘古那二柱神相並作堅此國然後者其少名
 毘古那神者度守常世國也。大國主命現身於
 泉國。往還賜。右於。然此時大地と泉と
 未斷離。連。地中より通路あり。知へし黄泉比
 良坂の事第六圖併考ふ。

記曰天照大御神之命以豐葦原之千秋長五百秋之水
 穗國者我御子正勝吾勝速日天忍穗耳命之所知國
 言因賜而天降也於是天忍穗耳命於天浮橋多志而
 詔之云々更還上云々。又曰尔日子番能迹々藝命將
 天降之時居天之八衢而上光高天
 原下光葦原中國之神於是云々

第九圖



記曰天津日子番能迹々藝命離天之石位押分天之八
 重多那雲而伊都能知和岐知和岐互於天浮橋宇岐士
 麻理蘇理多々斯互天降坐于竺紫日向之高千穗之久
 士布流多氣云々。天浮橋の往来事初伊邪那岐伊
 邪那美命の往来賜。天と地との間。近々聞

えのう。今皇御孫命の天降坐時乃るは甚遠く聞えて漸く
お相遠ざかりしるを見えしるをききしる天浮橋ハ天と地を相
連続る帯少て天地の漸お相遠ざかりゆくに隨ひて此帯を
漸くお細く微くたりて皇御孫命は天降坐きて此帯より
ちが既お天降坐して終り断離きて永く天と地との往来止
ぬるし是を物より譬へしといふ兒の臍帯は胞衣とついに
お既り生きてハ断離る如く又本草は實乃熟るれば帯は
ちがもが如しとてハお其狀の似しものもわづら其理
も全く同しとてしむるも皇御孫命は天降坐はる兒乃
生きて出るとか如し又二柱大神の生成り賜ひ天照大御神乃生
坐る此御國は君は定まると賜ひて天降坐坐して所知者も天

地國土乃事全く成竟るはばも木草は實の成竟て熟る
ると全同じ理なりとてや此お思ふりも皇國ハこれ天地乃根
蒂皇御孫命ハ四海萬國の大君お坐すといふとてわづら
ちく尊しおぞ申奉はる中よつのみし然るは世の人お
とて外國の妄説といふ惑ひ濁きて皇國乃かむくと尊に
とて識らざるもくを聞くもかへて云破らるるとてへ
とるハいひつるまがとてや。○天浮橋の事古書とては考ふは古
事記傳おと云きしる如く一つのみりとてわづら此處彼處
有り如くお見ゆ其を彼帯ハ一條をかく下は方地へ降
路ハ幾條もつりしるや又を彼帯下は方おてハ数條お分して
あるしにやわづらとては知らず何とてもたてのさ

まハかりしつゝおし。○地と泉と断離せしハ何時のほごつふこ
 と知れど天と地と離せし時代小准へく大くふハ推度るべし。
 大國主神初ハ現身なかり往還給ひて。上云るが如し。其時ハ
 めを連けし。是ハ尋常人の死ゆると同く。ふ聞ゆまハ其時ハ既
 給ひて八十垣手ハ隠て侍とらる。永く此世を去て泉國ハ隠侍て幽事
 を掌賜ふ。是ハ尋常人の死ゆると同く。ふ聞ゆまハ其時ハ既
 地よりつゞきて通ふ路を断絶し。しや。つゞむ。これ又こ
 まうにも知れ。大く世中ハ人乃死て泉より往て屍を此
 地より留まりて。魂乃ゆくと。此地より往て。道ぬれど
 と往くを現身ながら往還ふ。ハ
 連きける道無くてハ得往還らる。



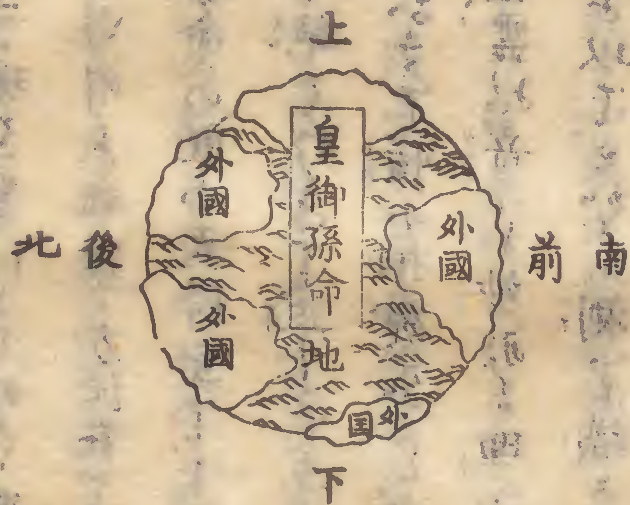
天照大御神

天

○是ハ天地泉ノ連キタル帶断離シテ。天モ泉モ旋ル
 トヨリ。圖シサテカク。如ク。圖シタルサマ。假ニ十五日。ゴロ
 ノ正午時。西ノ方ヨリ見タルト。ゴロノ大カク。ナリ。

第十圖

○天ト地ト泉トノ大サ
 小サナド。必シモ。國ニカ、
 ハ。コトナシ。又。其。各。ア。ヒ
 去ルコトノ。遠サ。近サ。ハ。殊
 ニ。カ。ハ。ラ。ズ。此。ハ。イ。タ。ク。縮
 メ。テ。圖。セリ。



泉

月讀命

天と即日けし泉ハ即月のこしはて其と上件の因ぞと如
く初と天地泉と三珠を貫たし如く帯はぎきて天ハいつも
地乃頂上了在泉ハソリと地の下方に在て共動き轉るこは
なりりりハ皇御孫命の既ハ天降坐て天下所^レ知看時^レ至
て其つぎき帯絶たれして正しく三つとわは是よりして天
も泉も地の中ふまきて恒ハ相旋るこ今乃現乃あしこは
の事とて神の産靈は奇く妙なり理ふよりて然るはこは
らふ人乃小き智を以てとかく測り識るべき限り何れは
世人日即天こ月即泉こといふこと知らざるハ初いまは旋らば
るいれど天と頂上ハ何れも根國と下方に在りてひりて頂
上を天と心得根國ハ地下ハ何れも心得來るかく旋る世りわ

る後もわ其心あて旋る物をバ日といひ月といひ天泉
とハ別物のごとくなれるこ或人間日ハ先づは夜とて恒も頂上り
在り世ハ晝夜の別あるなかり地の上ハ晝とて晝下半ハ
りのも夜とて然るは鎮火祭祝詞伊邪那美命の御言ハ日
七日夜七夜と見え記黄泉段ハ一日といひて見え大穴牟遲
神乃泉國ハ往坐り段ハ晝夜のさか見え天若日子段ハ日
ハ日夜八夜と見えとありとみあつて皇御孫命ハ天降
坐りしは日とて日の旋り初め世ハ何れも何れも晝夜をバ
別とてはなすこ答日月乃旋る世ハ何れも何れも晝日ハ出
没よりして晝夜を分つてはなす未旋らざりしは日ハ日ハ
よるは夜とて他ハ晝と夜との分らりて運ぶゆき又その晝夜

かゝるいふと問ふ己此をどうも解らざり師も問ふに師
の考ふ云々人の面乃頭頂より著る目と鼻と口も前乃
方ぬかるといふは同理に抑地を圓にして其形も上下前
後なるのきざりぬかるといふは實に其まじりぬかるとい
ふに日月星も東西とのまじりて南北ともまじりて東
故日をつのみ横りの見え國もつり然るにそのまじり東
西と南北とのまじりて何方も同じまじりぬかるといふ
准へて上下も前後もつりぬかるといふは其まじりぬか
中ハ皇國にして南方ハ前ニ北方ハ後ニ東方ハ左ニ西方ハ右を
故日月はや南方よりつりて北方よりつりぬかるといふは
さして前方をまじりぬかるといふハ皇國ハ大地の頂上なるに
著る

明と云れき又問ふ然らば日月をや南のまじりぬかると
いふ皆地の頂上と云べし頂上といふは皇國ハ限らぬ答皇國ハ
地の頂上なるに日月は南よりつりて北方よりつりぬかるといふは
何れもより頂上なるに故に日月ハ其前方よりつりぬかるといふ
なりぬかるといふ皇國と同じまじりぬかるといふは日月を南の空に望む國に
いふは皇國乃東西よりつりぬかるといふは近き故に○日と地と月
との三つ初ま一つとして分らぬ混りて彼浮脂の如くぬかし
物にして其中ハ清明なる物分きて葦牙は萌出如く上方
へ騰りて去りて天とぬかるといふ是即日又重濁なる物ハ分れて下
方へ垂降りて去りて泉とぬかるといふ是即月なりぬかるといふは其中間
のまじり留まぬ物是大地よりつりぬかるといふは日ハ質ハ清明なりぬかるといふ此

此の中、申すハ、リ、此は物心、然るも火と全く同じき物も非
ず。彼、浮脂の如くなる物乃中、混じりて、一つは、
も。既分も昇りて、日と成るる、
火と成るる、
お残り、滓の、
き、
又明と、日ハ火と異なりて、火乃如く物も照らす光も、
賜ふ光ハ、日ハ光も、
大御光の、上ハ云、
神、天、石屋、
天地皆、
或人、
火ハ日、
滓

の如しと云、其滓ハ光ありて、日ハ光なきこと、
物ある故ハ、
火乃ハ、炭、
專ラ火を、
着、
ある、
地なる物、
非、
去、
物乃滓、
○古事記傳十七附
○二十四

